

---

# うずのかなた

参陽 沙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うずのかなた

### 【Nコード】

N7880J

### 【作者名】

参陽 沙

### 【あらすじ】

不思議な少女と少年の交流。  
少年は、少女の過去に触れる

彼女はとても幼く 純粹で 無邪気だった

彼女が好んだものは全て 彼女のそばで永遠にあり続けた

小石が音を立て落ちてゆく。一寸先は崖と 絶えず渦巻く潮が広がっている。近づくもの全てを飲み込み、底の無い海に引きずり込む潮。かつてここに存在したという、神秘に満ちた国を丸飲みした潮。その端はおるか、中心さえ見えない。

カラコロと小石が落ちてゆく。ゴオオオツと響き続ける音に消える。

『シエリル、危ない』

不意に、背後からそっと抱かれる。彼女はそのまま、僕を潮から遠ざける。

「やあ、ユンナ」

潮から十分離れたところで、彼女を振り返り笑みを浮かべる。

『あれに近付いちやダメよ』

彼女はその、つややかな白い毛に覆われた腕を放す。

『前も言ったでしょ？ 類人猿ゴリラになるのは嫌なの』

「ふん。何で？」

僕の質問にため息をつき、彼女は両腕を地につける。その姿が輝き、小柄で身軽な雪豹へ変わる。

『何度も言わせないで』

うん、ごめん。わかってるよ。人間やそれに近いものに、なるのは嫌なんだよね

口に出さずに謝る。彼女には聞こえないが、感じ取ることにはできるだろう。彼女は僕を一瞥し、優雅な足取りで森へ戻る。僕はもち

るん、その後を追う。

『……わかつたんでしょ？』

僕は苦笑を思わずもらす。やっぱり気付いていたんだ。

僕が彼女を見つけてから一ヶ月。その大半を、僕は彼女が何者か知るために費やした。彼女の言葉から少ない手がかりを拾い、ありとあらゆる書物を読み、やっと見つけた答え。今日は、それを確かめるために来た。

「多分」

『……湖に着いたらね』

「答えてくれるの？」

突如歩を止めた彼女を、危うく蹴りかける。こちらを向いたネコ科特有の目が光る。

『今日は特別。どう伝わってるか、知りたいし』

そう言っつて再び歩き出す彼女。僕は何とも言えぬ気持ちで彼女を見つめていた。

『で、どこから始めるの？』

豹からリス（もちろん白い）になった彼女を見つめる。まずは最初が肝心だ。何一つ見逃さぬよう、彼女の目をのぞき見る。

「神秘の姫君、ユーンティナツテ・レイアテシユル」

この一ヶ月、ずっと青かった瞳が色を変える。一瞬で白くなり、徐々に紫に染まる。

確か白は驚き、紫は……忘れたな

だが、これではつきりした。

『ユーンティナツテ・レイアテシユル。ふふつ。久々に聞く名ね。彼女のこと、どう伝わってるの？』

「……姫君は、本当に姫だったの？」

『ええ。彼女は潮に飲アレまれた国の王女。神秘の姫君、または……永遠の姫君と、呼ばれていたわ』

僕は草むらに身を沈める。最後の確認はもうできた。僕は彼女が

誰なのか知った。

『彼女について、どのくらいわかったの？』

「数多くの不思議な力を持っていて、その一つが永遠。呼び名はそこからきてるんだって」

リスが僕の胸の上で丸まり、白猫となりのどを鳴らす。

「姫に力を分け与えられると、それは何であれ永遠となった。美しく咲いた花だったり、音色だったり、光だったり……永遠に、そのままの姿を留めたんだ。姫は、様々な美しいものを愛した。姫が愛したものは、いつまでも、姫のそばにあり続けた」

猫をそつとなでる。ゴロゴロという音はまだ続いていた。

「でも、なぜか国ごと全て消え去った。……何があつたの？」

喉の音が止む。しばらくユンナは答えなかった。

『わからない。今となってはもう、わからない。彼女も含め、皆、あまりにも無知だった。全てが原因であり、無知が原因だった』

「今、推理することは出来な…… ったあ！」

『ごめん』

一瞬、猫が爪を立てた。ヒリヒリと痛みが残る。

『ごめん、シリエル』

申し訳なさそうな声が届く。猫は僕の隣に飛び降りる。

『ごめん』

「これくらい、平気だよ」

「……違う。違うの」

いつもは頭に直接響く声が、聴覚を刺激する。僕は驚いて隣を見た。

銀白色の髪と憂いを秘めた金の目。銀砂が振られた金紗をまとう少女が、見下ろすようにして立っていた。

「違うの……違うのよ」

あまりの美しさに声を失っていると、少女は軽く首を振って言った。

「私は今、嘘をついたの」

「……嘘？」

「ええ」

僕は身を起こし、少女を見つめる。少女はゆっくりと、語りだした。

「彼女は、美しいものを好んだ。美しいものだけを、好んだわ。理由は、彼女自身はとても醜かったから。醜いと思い込んでいたからでも彼女は、最初から永遠の力を使っていたわけではないの」

「……そうなの？」

そのことは、どこにも書かれていなかった。少女はそつとうなずく。

「彼女が永遠を与えだしたのは、彼女の姉が　彼女が最も慕い、最も美しいと思っていた姉が亡くなってからよ。彼女は、不変のもの存在しないと知った。力を使わない限りは……」

少女の声が、徐々に小さくなっていく。僕は身じろぎ一つせず、少女の言葉に耳を傾ける。

「それから彼女は、気に入ったものに、片っ端から力を与えていったわ。銀嶺の上に満開の桜が立ち、道には紅葉の絨毯が敷き詰められる。舞台では毎晩、彼女が好む劇だけが行われ、食後のお茶はいつも同じ味の紅茶とお菓子。いつも同じ場所に、同じものが存在している。この現象は、彼女が足を運んだ全ての場所で起こったわ。隣国も例外なく」

ここで一旦、少女は口を閉ざす。目を伏せ、息を整えるかのように呼吸する。

「……ユナナ？」

少女は微笑む。が、すぐにそれを消し、続けた。

「人々は彼女を神と崇め、彼女が好んだものを敬った。……でも、それはすぐに終わりを迎えたの。美しいけれど、いつも同じ状態に飽きたのだと思う。彼女は、ある日突然、与えた力を全て回収したの。そして、崩壊が、始まった……」

「……えっ？　何で？」

永遠でなくなっただけで、なぜ？

そう訊くと、少女は空を見上げ、両手を広げた。

「全ては可変。絶えず変わり続ける。その流れを止めたら？ 変わるうにも変われないため、変わるためのエネルギーは消費されぬままどんどんたまり続けるわ。なら、それをいきなり、いっぺんに流したら？ エネルギーが膨大過ぎて、ショートしてしまうのよ」

「……つまり、変わろうとする力が大きすぎて、耐えられずに崩壊してしまった。てこと？」

少女は手を下ろし、頭を垂れる。

「ええ、そうよ。しかも、彼女はその強大過ぎる力を以て、国を丸々六つ 隣国も入れてね 永遠にしていたのよ。結果、人も大地も海も空も、全て無くなってしまった。……あの渦はね、ただのカモフラージュ。本当は存在していないわ」

少女は僕の顔をのぞき込む。

「これが全て、よ」

僕は茫然と少女を見る。想像以上に、巨大な話だった。このことは恐らく、僕ら以外は誰も知らないだろう。どこにもそんなこと書かれてなかったのだから。

「それが……君の、罪？」

少女は目を丸くし、苦笑した。

「違うわ。私の罪は、レイアテシユルを止められなかったことよ」

「なら、何で」

「何で、今まで生き続けてるのか？ て訊きたいんでしょう？ ……私、もう一つ嘘をついたわ。彼女は、私に与えた力だけは回収しなかったの。私はね、彼女にこの姿を与えられたの。彼女の姉に似せた、この姿を。彼女は、姉だけはもう二度と、失いたくなかったのよ」

僕は言葉を失った。予想が外れていたから。そして

ユンナの、あまりに悲痛すぎる、憂いをまとった笑みに……

「……………」

「シエリル、もうあの渦に……いいえ。この森に、近付かないで。あそこは今も崩壊し続けているの。いずれはこの森も、飲み込まれるわ」

そして、僕らは二度と会わなかった。そう、永遠に。

彼女はとても幼く 純粹で 無邪気だった

彼女が好んだものは全て 彼女のそばで永遠にあり続けた

そして 彼女は 好んだものと共に消えた

ただ一つ 姉の似姿だけを残して



(後書き)

初の短編です

夜中に書き上げたものなので……どこか矛盾したところなどがある  
かもしれません

が、自分ではうまくいったのでは……なんて思ってみたり

読んでくださった方、ありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7880j/>

---

うずのかなた

2010年10月8日15時12分発行